

自然をつなぐ仕事 自然とつながる暮らし

7割を山地が占める越生町では、古くから林業が栄え、その恵みをふんだんに取り入れた

「自然とつながる暮らし」が営まれてきました。自然は人に道具をもたらし、心を育み、豊かな文化を生みだしていきます。



良質な木材「西川材」

「西川材」とは、飯能市・越生町・毛呂山町・日高市の4市町から産出されている杉・桧の総称をいい、そのルーツは江戸時代までさかのぼります。江戸大火の後、江戸では木材が不足していました。そこで筏（いかだ）を組んでこれらの地域の川を経て江戸まで大量の木材を送り届けていたことから、江戸の人々が「西の川から送られてくる良質の木材」としてこの地方の木材を「西川材」と呼ぶようになったといわれています。この地域の土壌・気候は杉・桧の生育環境に適しており、色艶がよく木目の詰んだ（細かい）年輪、強度のある優良材として評

価されています。越生町は、西川材が地元産材であることに誇りを持ち、西川材の更なる普及に努めます。



西川材を活用した校舎の木質化



伝統の建具製作の技術による「積み木」

自然が育む 感性の手しごと

ちいさな里山でひそかに育まれてきたものとして、芸術や工芸があります。透き通った山の空気、越辺川の流れる音、豊かな自然環境が感性を育み、創作活動へと誘ってくれます。町内には陶房やギャラリーカフェなど、実際に作品を鑑賞したり、作品づくりを体験できる場も増えています。越生で生まれたこだわりの作品や創造性に触れ、ゆったり流れる時間を過ごすことができます。



陶房ひと葉



越生の伝統「渋団扇」しぶうちわ

表面に柿渋を塗って仕上げる「渋団扇」は、越生の代表的な特産品として明治時代に栄えました。明治9年（1876）の『武蔵国郡村誌』には年産42万本、同44年の『埼玉新報』には240万本の製造数に達したとあり、全盛期には50軒ほどが製造に携わっていました。

形は「文字団扇（いちもんじうちわ）」といい、肩骨が真っ直ぐで、柄に対し直交しているため、特有の腰の強さを持ちます。扇いだ時に強い風が起せるため、鱧屋などで調理の際に愛用される逸品です。現在も伝統を継承する「うちわ工房しまの」では、押し花を入れたうちわや貼り体験を通じて、越生うちわの良さを伝えています。



表面に柿渋を塗って仕上げる渋団扇



木材の伐採・仕入・製材・販売を一貫して行う
有限会社 島田木材